

乙 頁

第105号 通巻19巻第2号
1999年7月15日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
電話・FAX 077-585-4397

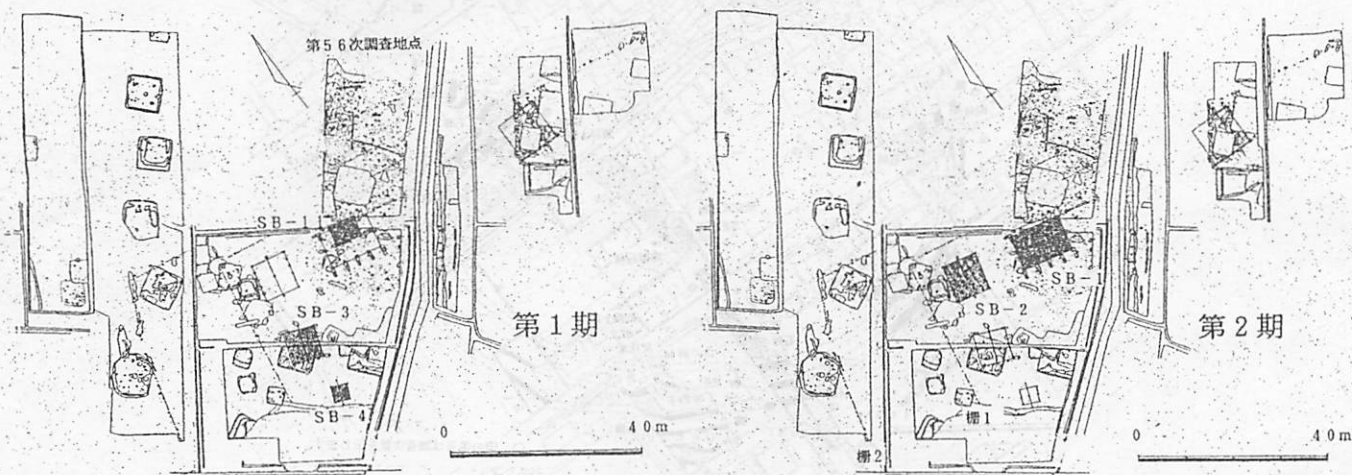
〒524-0212
守山市服部町2-250番地

大型建物の重複を確認 伊勢遺跡

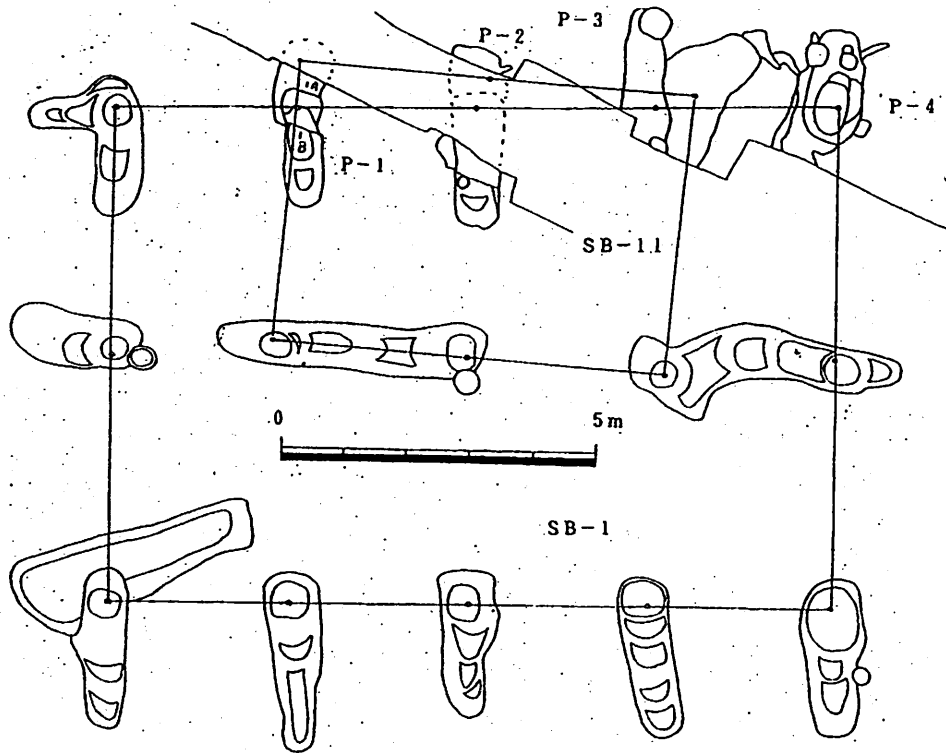
重要遺跡確認調査を進めている伊勢遺跡で、大型建物が重複して存在することを確認しました。平成4年に発見された大型建物(SB-1)は、弥生時代後期の全国最大級の総柱式大型建物として紹介されました。しかし、建築史の宮本長二郎先生(東北芸術工科大学教授)から、SB-1は2棟の大型建物が重複しているのではないかという指摘があり、①総柱式建物説、②重複説、③屋内棟持柱付き建物説など意見が分かれていました。今回の調査でSB-1のすべての柱を検出し、柱穴の切り合い関係を確認した事によって2棟の建物が重複していたことがわかりました。新たに確認されたSB-11は、1間×2間(3m×6m)の規模で、SB-1に先行して建てられていたことが確実となりました。SB-1とは約6°の建物軸の差があり、この角度のずれは祭殿と推定されるSB-3と一致します。このことから、最初にSB-3の祭殿を中心にSB-11、SB-4が建てられ、次の段階でSB-1・2が建てられ、さらに二重の柵がその周囲をとりかこんでいたと推定されます。

伊勢遺跡は弥生時代後期、紀元2世紀を中心に発達を遂げる大集落遺跡です。丁度、魏志倭人伝の30余国に分かれていた時代に発達する遺跡です。その中心部には大型建物が計画的に配置され政治や祭祀を執り行う場として機能していたと考えられます。邪馬台国時代の近江南部地域に、強力な力をもつクニが存在したとみられ、伊勢遺跡はそのクニの中心と考えられます。

今年度は、中心部のプランを確認するために、南東部及び北側で確認調査を実施する予定です。今後の調査によって、さらに内部の様子が明らかになるものと期待されます。(伴野)



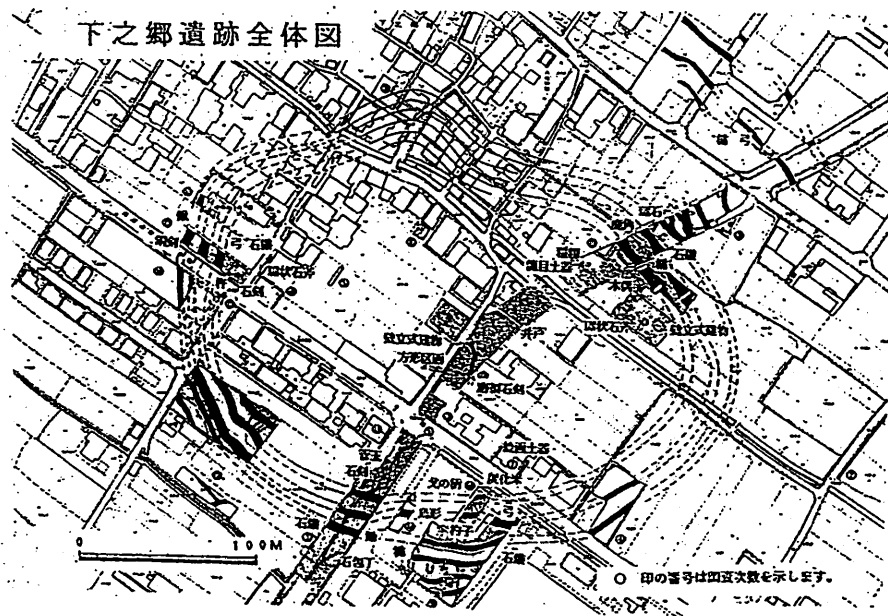
▲ 伊勢遺跡中心部建物群の変遷



▲ 伊勢遺跡大型建物平面図

下之郷遺跡の調査

すこやかセンターの150mほど北東側の水田地において、重要遺跡範囲確認調査を実施しました。今回の調査地は、下之郷遺跡の環濠集落の南西辺にあたり、都市計画道路建設に先立つ調査で3条の環濠が見つかった地点（3次調査）と3年前に集落の出入口や銅剣が発見された地点（23次調査）の間の中間の場所にあたります。表土を30cm程取り除いて、昔の地表面まで下げたところ、大きな溝が5条平行して検出されました。そして、この5条の溝について、深さや埋没の様子を確認するために、それぞれの溝の一部を断ち割り、土層を観察しました。その結果、内側の3条は非常に規模が大きく（幅6～7m・深さ約2m）、土器・石器・木器・自然遺体等が大量に確認されました。外側の2条はやや規模が小さく、幅

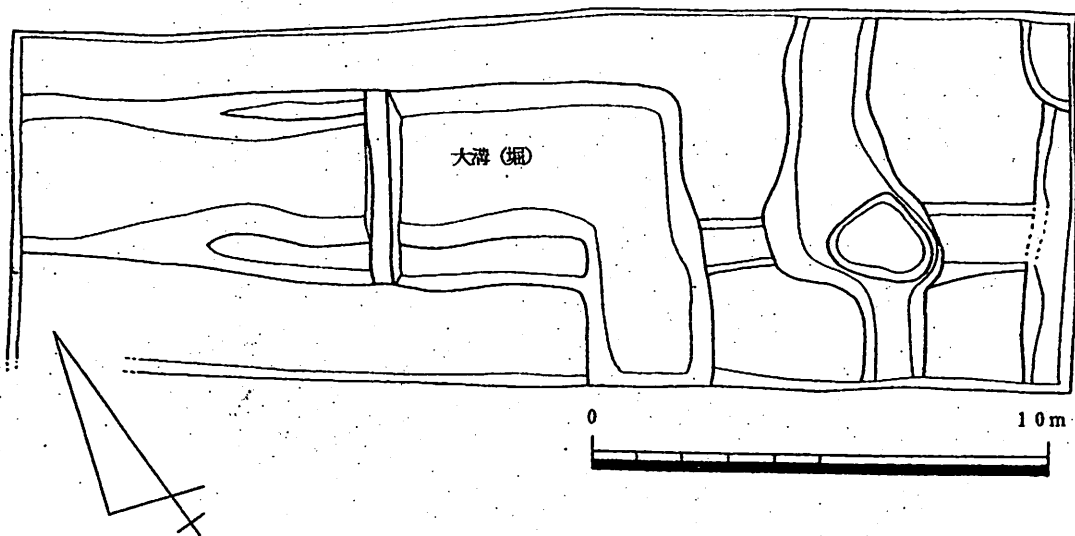


▲ 下之郷遺跡全体図

約4m、深さ約1mで遺物はあまり出土しませんでした。このことから、内側に掘られた3条の大溝については集落全体を取り巻く環濠で、外側の2条については部分的に確認されている条溝と推定されます。内側の3条の環濠については、掘削の際にたくさんの動物の骨や稲稈が出土したため、土壌を採集しました。現在、琵琶湖博物館で洗浄と同定の作業を進めています。近いうちに、下之郷遺跡の弥生人が食べていた食物について紹介することができると思います。(川畑)

二町鏡遺跡の調査(第10次調査)

共同住宅の建築に伴い4月下旬、物部小学校から100mほど南側の水田地で調査を行いました。今までの周辺部の調査では、13世紀後半から14世紀代の幅2~3mの溝で区画された中に、建物や井戸が見つかっています。今回の調査では、このような屋敷跡の一番外側に掘られた大溝(堀)が、くの字状に曲がっているのが確認されました。大溝からは土師器・黒色土器や常滑焼・信楽焼・青磁などの陶磁器、滑石製の石鍋、漆皿の底部、横槌・匙などの木製品のほか、銅銭が10枚出土しました。内訳は開元通寶が3枚、聖宋元寶が1枚、皇宋通寶が2枚、元祐通寶が1枚、不明なものが3枚でした。いずれも中国宋朝銭と考えられます。(大岡)



播磨田城遺跡の調査(第1次調査)

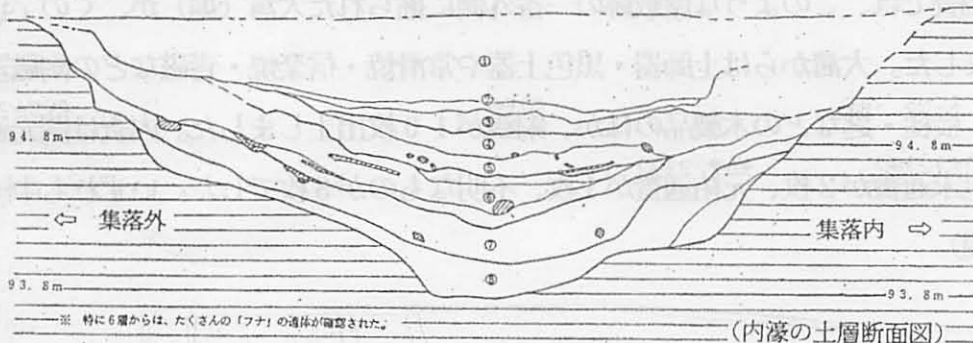
宅地造成に先立ち播磨田町の畑地で、昨年12月から継続して調査を実施しています。現在、三つ目の調査区の調査を終えようとしています。ここでも、現況の地割りに沿って走る溝等を検出しています。このほか、不定形の土壇や掘立柱建物2棟以上、土壇墓1基を検出しました。掘立柱建物は2間×3間ないし、3間×3間と考えられます。出土遺物から14~15世紀代の遺構と思われます。

これら中世の遺構の下から、幅10mほどの東西方向に流れる河道がみつけられました。上層は粘土層によって覆われ、その下に腐食土が堆積していて、この層から倒木が見つかりました。おびただしい木の実や木の葉に混じって土器やサヌカイトが出土していて、縄文時代晩期の河道と推定されます。(畑本)

弥生の貝塚 17 下之郷遺跡の調査から

弥生中期の巨大環濠集落、下之郷遺跡は昨年度の道路建設に伴う調査に引き続き、現在は遺跡の範囲を把握するための確認調査を進めています。また、発掘で出土した膨大な量の遺物は、埋文センターや琵琶湖博物館にて復元や同定の調査に入りました。今回はその調査の一部について紹介します。

【下之郷遺跡第25次調査】 平成9年の10月より開始された、環濠集落の北東側の発掘調査では、調査区内で6条の大溝が発見されました。また過去の調査では、さらにその外側に3条の大溝が確認されていたことから、集落の北東側には9条の大溝が掘られていることが判明しました。この9条の大溝は、いずれも規模が大きいのですが、特に内側の3条については、幅が6~9m、深さが2m程もある巨大なものです。外側に掘られた大溝は、途中で途切れたり、合流したりするものもあるのですが、内側の3条については、基本的に集落全体を完全に取り囲んでいる「環濠」と推定されます。



【内環濠の調査】 集落の周りにめぐらされた3条の環濠の中でも、最も内側に位置する環濠は、規模も大きく、外側に掘られた環濠よりも古い形式の土器（近畿第IV様式初頭）がまとまって出土します。また、生活の場に近ことから、弥生人が廃棄したと思われるいろいろなものが出土します。例えば、ニホンシカ、イノシシ、ノウサギ、スッポン、カエル、などの動物遺体。例えば、タデボシガイ、ドブガイ、シジミ、といった貝類、また、雑種メロンの一種やモモの種、それから稲粃等が多数出土しています。これらは、弥生人たちの貴重な食料だったのでしょう。

【土壌洗浄】 発掘調査を行っている現地では、目につくものの調査と記録に追われているのですが、調査が終わった現在では、もう少し細かなものの調査も進めています。それは、現地で採取してきた土（弥生時代のもの）を水に浸し、細かく砕き、その中に含まれる残骸を選び出す作業をすすめています。その中には、当時、集落の周辺に生息していた昆虫や繁茂していた植物の種子、それから、食べられていた魚や小動物の骨などが、たくさん含まれています。

【弥生人が好んで食べた魚介類】 下之郷遺跡の環濠の土壌を洗いだしてみると、今までに予測はされていたものの、なかなか実証されなかった事実が浮かび上がってきました。それは、琵琶湖の周辺で生活していた弥生人たちが、淡水産の魚介類をたくさん食べていたということです。現在、琵琶湖博物館で、どの様な魚の、どこの骨にあたるのか、検討をすすめています。魚介類は、それぞれ生息している地域や捕れる季節がちがうので、種類や量がわかれば、弥生人たちの漁撈や食生活の様子が、さらに明らかになるでしょう。

(川畑)

